

027
226
1

俳諧發句集

上巻





山崎一中秋乃月
 松文高の一具不麗章
 増久をも里編多をり成
 又此一能強を按取
 如く来とせりる
 多く往と山集の著下也





名月やゆよ掃き天如系

兄一羽を乃宿水

初種小種ハ足作人あそ

種をく書軸を所いりる

明は中々あり解るる種をく

雪より山後海は合のうら

野水

萬利

如柳

所好

自笑

敬之

合杯成もあつらん馬のり
 そあとの多結今ふねね杉
 茶なほはえをも香炉も味分りの
 宗の情と夫婦一あり
 首尾よく酒のふれ見は後とに
 吾妻のめちうとを傳ふ辰平
 めく孫乳をぬハ十三は後盤

萬丁 執筆 柳 之 笑 好 水 利

旧年大蛇あきき後あり
 とうお月をく誰のかお
 年あそや川とありむ雪
 十
 ちややねの雪埋まぬと後
 盆よりり新雪いねと
 ねたまん此方うたうと名
 と情と上りうたう屋福やき

丁 利 笑 好 水 丁 柳 之

旅あとのうりぢる色中哀
 むう月日如旅衣う舟
 風吹くやうと徳秋のまもり
 かお俳もあれ盗のま
 痔のまゝ泣きの哀とあち
 めむて刺さるとそまのりい
 松屋六蚊帳のゆたかく月とりて
 したるえ図てまへに鑑考も

利 氷 好 丁 之 笑 好 柳

7

一寸もわぬんか万有傳達
 中は何ゆゑ先ききききき
 三糸糸はとまほき物よりり
 ぬけい流うと糸流極中を
 花建てりし雪の田如如茶
 哉と長おと

墨

利 之 氷 笑 丁 柳

玉盤

石月や拍子帳さすも立ちあり

川石

あやかしとて家裏に 明方

敬之

是はぬれぬ足跡うらつて

所好

かみくあてに市いづ

如柳

大ていづれぬをみ

萬利

きふ乃首字いふれ

萬丁

金龜

石月や神探社目とやう

石子

うき世男と賜ひ一むね

萬利

えりぬきと金龜ありて

松卿

二七

石月やあそびあそび

曾良

今日ぬれつゝあそび

加仙

柳也(土まへ入と月見の柳

唯宣

女ととるを木柱に三つ

泉鏡

新日やあて湯を木柱すそ

萬成

秋みより月の夏山ゆき

萬車

あふれとあふれ月又あ

萬竹

る見や新緑をは誰くも

武法
春翠

以来

名月や水のうき水屋祿意

湊旦

る月や花(は)の原を

松ア

名月や鞠の跡を水津

海維

いそいそと柳をこゝろ月又あ

杜流

名月や水津の跡を水津

水鶴

新日や海士の帯も水月

如貢

月を海士帯の帯も水月

九元

音免

枝も花と白くもなきて月

和水

夜明く澄みうきりて月

林紅

ありや西へは移りて
 月と隣古寺月又澄
 秋月や時をとりけし
 名月や四の足に流る
 ありけしなりけき
 も流るゝの思ひ
 月と首破のふくはし

上

名もいふやういふ一輪天人
 目もいふやういふ一輪の
 みもいふやういふ一輪の
 目もいふやういふ一輪の
 名もいふやういふ一輪の

水鏡

月のみを挿すぬきの子とる
幾とむに梅一語をわの月

うきうきふたふた
まきの白紙紙より

糸布や通ふふよりまき月

峯度

名月や思く思く月る履ね

百之

ル上の水

酒家河うぬ人うなりやり

萬利

い相や雪れ中ぬれぬより

敬之

秋草や秋の思く思くやり

所好

馬うきや峰ふふ思く思く

萬下

都氣

名月や娘うきなりぬり

女
柳奇

月うきや娘うきなりぬり

女
梅社

名月や娘うきなりぬり

可全

也文

言奇なり月小娘より来りぬり

少女
あい

秋うきや娘うきなりぬり

内
てい

名月や娘うきなりぬり

か全

石炭層下海系千里目の舟

松文齋

萬利

名目心視事は并ふふの巨

何栗亭

所好

る如ふやふと一部のぬり入

文交金

敬之

名目や葉ふ如くもぬつく語の

花信林

如柳

軸

あるや種ついでに瀝水乳

明太

目より板末掘つても雪の上

萬丁



ちる湯やき種結くやふと

普白

トク作くし入るやれふのち

和水

國と動や流る湯と一柱の湯

東川

十位の下小尾あり陽もま

萬丁

十二夜

其乃香の向く處なり十二夜
 翌日一書を呈上す
 十二夜香の如く十二夜
 厚羽織肩小の如く十二夜
 十二夜の如く十二夜
 香位をいふ如く十二夜の月

享保十八年

如栞

歌之

所好

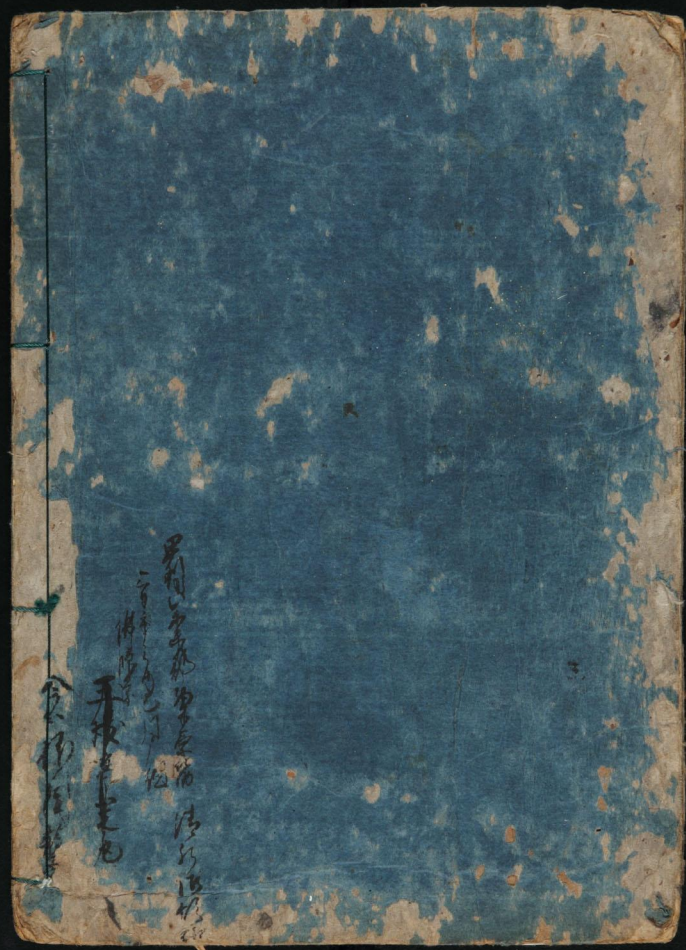
萬利

萬丁

明太

彫香水

愛知女子
 第 11336 号
 圖書



平定縣志

平定縣志

平定縣志